
神様と出会う二つの方法

虎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様と出会う二つの方法

【Nコード】

N6702X

【作者名】

虎鉄

【あらすじ】

人が生きるにあたって人生の転換期があるとしたら、春といえるだろう。特に桜が咲くのを「出会い」とすれば散るのは「別れ」というように、そんな比喻を今とっさに思いついてしまうほど怠惰で墮落、他人には無関心を貫く暇人、つまりこのぼくはこの四月の春、祐天寺神流と出会ってしまう。この出会いは多くの人生の転換期と
ゆうてんじかなないうのだろうか？ いわないのだろうか？ まあ、どうでもいいんだけどね。

プロローグ

あの日の彼女はいつもどおりであったと思ったが、今思えばどうもそれはぼくの勘違いであったようだった。

「いいな。今から問う三つの質問に答えろよ。ちなみに答えなかつたら殴る。応えなくても殴る。だから、率直に答えろよ、率直にだぞ。つまりは素直にだ。いいな、素直にだぞ」

ぼくの目の前にいる彼女、祐天寺神流ゆうてんじかなはそう言った。

そう神流はいつもこうだ。なぜかといういつも唐突に質問や疑問を投げかけてくる。しかもけっこう要領得ないものばかりである。なんの因果関係があるかも皆目見当がつかない。

さらに、それらのぼくの答えが神流に気に入るようなものでないと蹴ってくる。鳩尾に。つま先蹴りが。タイ人顔負けのが。

そんなものはくらくいたくはないので、ぼくは内心で覚悟を決め、神流の質問の内容を聞いた。

「うむ。ではひとつめなんだが……神様とは何だろうな……」
……………ふう。

「人間は弱い生き物だ。だから人間が生み出した偶像には間違いないだろうけぶえほ……」

み、鳩尾に蹴りが……。鋭い蹴りが……。なぜ？ホワイ？ボクナニカヘンナコトイッタカナ？

「そういうことをきいているんじゃない。もっとこう……、いやもういい。次だ。次の質問に移るぞ」

ちよつと待ってもらいたい。鳩尾にいいものもらったから、うまくしゃべれない。しゃべることができない。だから、ちよつと待つて欲しかった。ていうかまだ答えきってないんだが……。

だけど、神流という女は、

「ほら、なに倒れているんだ。それは人の話を聞く態度ではない

だろう。早く立ちたまえ」

こういう奴なんだ。

ぼくはまだ鳩尾が痛むが嘆息しながらものっそりと立ち上がった。ここで立たねば……おそらくは追撃がくるだろう。

「うむ。よし、ではふたつめだが、何で人間は死ぬのだ？」

……今日は特に脈絡のない質問をしてくるな……いったいどうしたのだろうか？

「人間に限らず、生あるものには死は絶対だろ。それをくつがえずことなんかおこがましいことだ」

まあ、ぼくにとって「生死」ということなどに興味はおきんがな。

「やっぱり、そう……なんだよな……」

神流は上を向き何か物思いにふけた。
らしくない。

いつもの神流らしくない。

あの神流がするはずのない質問をしてくるだけでも異常事態だ。

「明日は雪が降るかもな」

「そんなものは起きん。ましてやまだ十月、雪も降らん」

ごもつとも。冗句をこうも真顔で答えるのはいつも通りだ。

神流はふうと一息つく。

「最後の質問だが……」

神流は言いづらそうにぼくの方を向く。そのときの表情が少し硬く、不安な感じだったのをぼくは見落とさなかった。

神流は息を吸って、吐く。そして、訊く。

「神様と出会う二つの方法って知っているか？」

それから一週間後、祐天寺神流はいなくなった。

プロローグ（後書き）

初めまして。虎鉄といいます。
なんか思いついたままに書いてしまった作品です。暇なときにお気
軽に読んでみてください。

?

ドアをノックする音が聞こえた。

それから声が聞こえてくる。未だに聞き慣れないその声は莉子さんの声だろう。

朝ですよう、というその間の抜けた目覚ましは、余計に睡魔を誘わせる。

だけど、ぼくは、パチリと目を開く。そして、のそりとベッドから上半身を起こした。時計を見る。七時十分。目はまだ眠たげそうな感じだが、頭は逆に冴えていた。めずらしいことに。

それもそのはず、今日から新学期、学校へ行かなければならないからだ。

はつきりいうと、学校へ行くのはめんどくさい。歩くのはだるいし、このままずっと眠っていたいとさえ思っているほどだ。

だけど、これで……、

「……この家に居なくてすむな」

ぼくはぼそりとつぶやいた。

ぼくは学校指定の学生服に着替え、鞆を手にはら下げ、自分の部屋を出て階下へと向かう。

途中、にゃあと鳴くぼくの飼い猫が寝転んでいた。

……十点だな。

「……クロエ。……行ってくるよ」

黒猫のクロエに手を振って階段を下りる。後ろで「いつてらっさい」といつてくれるようにクロエはにゃあと鳴いた。

……それにしても……二十点だな。シンプル、イズ、ザ、ベストだ。

一階の居間にたどり着くと、そこには、父と莉子さんがすでに朝食を摂っていた。

「……おはよう。父さん」

ぼくは父にあいさつをだけして、そのまま玄関へと向かう。だが、途中で父の言葉に止められた。

「待ちなさい。母さんにあいさつはどうした？」

厳格に言い放つ父。母……莉子さんはそわそわしている。

「……行ってきます」

ぼくは言葉だけ残して家をでた。

高校一年流れるがごとく流れ、早くも二度目の桜舞う季節。

ぼくは高校までの桜並木の通学路を歩いていた。

去年から歩くことになったこの通学路には、歩道の両側に桜の木が挟むように植えられていて、ちょうど今満開を迎えている。とても景観だ。

四月の春の風はゆるやかで暖かく、桜の花びらをぶわあと舞い散らす。ひらひらとゆれて散っていくそれは人々の心を魅了する。

……だけど、花なんてものは二、三週間すれば力尽きて散っていく。それは人の心を魅了しない儚いものである。だからこそきれいに咲いているわけだがね。

歩くこと約二十分ちよいで、ぼくが通う私立神崎高校かんざきの校門前に着いた。

私立神崎高校は今年で創立五十年という古い歴史があり、偏差値が六十前後の県内でも屈指の有名進学校だ。それに加えて五年前に校舎を改装工事してきらびやかな新校舎となっている。

神崎高校にはもうひとつ特徴がある。校舎の後方にそびえ立っている大きな、とても大きな山が存在する。その山はこの町では神が住まう霊山としていわれている。定かではないが、山に住む神がこの学校の生徒を見守っているんです、と校長は言っていた。校長が言ったせいかな、ものすごく嘘っぽく聞こえてしまったのを覚えている。

……まあ、神がいようがいまいがどうでもいいんだけどね。

ぼくは校門から一步踏み出す。この一步がまた退屈な日々への一步だとさえ思えてくる。憂鬱だ。

まわりを見回しても、いつもこいつもまるで今日から輝かしい日々が始まるのだらう、というような希望や期待に胸をふくらましているような奴ばかりなのに、ぼくという者は……

まあ、いいんだけどね。

そんななかぼくの耳にだけ、とはいかないほどのささやき声が聞こえてくる。

「ねえ、見てあの人」「きれい、モデルさんかな?」「……女神だ」「私もあと二十歳若ければ……くそう」

ふと眼をそちらに向ける。

桜吹雪の舞う中に、一人、女性が悠然とりりしく、美しく立っていた。

その彼女を含む光景はとても絵になっている。皆が見とれるのも無理ないなと思ったほどだ。

まあ、そんな彼女も自分が注目されているのを自負しているみたいな感じがする。ほら、みなさい愚民共みたいな?

まわりが足を止めている最中、ぼくは踵を返し、クラス発表の掲示板へと向かう。

ぶるっ……。

なんか背筋に、冷たい視線を感じたような、感じなかったような、気がした。

後ろを向くが何もない。きれいな彼女と野次馬がいるだけだ。はて?と思いつながらぼくは前を向きどこのクラスかを調べる。

……あつた。二年五組か……。他の奴は知らん名前ばっかだ。まあ、覚える気もなかったけど……。

クラス確認を終えたので、そのまま玄関へと進み、指定された靴箱にスニーカーを放り込む。そして内履きに履き替えて、階段へと向かう。

二年生の教室は二階にある。今後、階段を使うことになるのかと思うとおもわずため息が漏れた。

……階段。地味に疲れるんだよな。

二階につき、L字型の通路曲がると、最初の教室が二年五組であった。

教室に入ると、まだ早い時間帯であるためか、人がまばらであった。教卓近くまで歩き、黒板に貼られてある座席表を見る。五列目の前から七番目、後ろから一番目、つまり最後尾だ。うん。悪くない。

まあ、どこでもいいんだけどね。

……うそ、一番前とかいやだね。寝れなそうだし。

まあ、一番前でも寝るんだけどね。

鞆を自分の机の脇にぶら下げ、机に突っ伏し軽く自分の世界に浸る。ああ、眠いな。

しばらく眼をつむっていたら、どうやら時間がたっているようだ。まわりがざわめいているのが耳に入ってくる。

顔を上げると、教室内には人がもう集まっていて、そこかしこで数人ずつ集まって談笑している。

がらら、と教室の扉が開き、担任らしき人が入ってきた。

おはようございます、とあいさつをしてから「担任の水澤ゆかりです」と軽く自己紹介をした。

まわりの男子は担任が女性で、若く、そして美人ということに歓喜があっている。女子もきれいで優しそうとかとささやきあっている。みんながみんな楽しそうにしている。笑顔に花が咲いている。ぼくは違うけど……

まあ、ぼくには関係のないことである。

他人には興味がないし、興味が持てない。

おそらくぼくは……どこか欠落しているのだろう。

欠陥製品だ。

きつと、大切な、なにかをどこか落としてしまったんだろう。ま

るでカギを落とすかのよう。ポロンと。

だから、このまま、ズルズルと、這いつくばるようにズルズルと、生きていく。まるで死んでいるみたいに、生きていく。

ズルズル、ズルズルと。

だと、思っていたんだが。

ぼくは。

息をのんだ。

有無を言わさないだろう眼光に。

人々を惑わすだろう美貌に。

圧倒的な存在感に。

そして何より……、その彼女が放つ異質さに。

祐天寺神流はやってきた。

?

祐天寺神流さんは東京の高校から母親の都合でこの神崎高校に転入してきました、と担任水澤先生が説明した。

さあ祐天寺さん、と水澤先生が彼女に自己紹介を促す。

彼女は一步前に出る。すうっと、背筋を伸ばす。すらりとした長身の彼女から女性らしい高いソプラノの声音が教室に響く。

「うむ。祐天寺神流だ。これからよろしく頼む」

彼女の発した言葉は短く、堂々と、はきはきとして、そして、どこか威圧的であった。教室内がしいん、と静寂に包まれる。だれもがあっけにとられていた。彼女の美しい容姿に、鋭い眼光に、響かせる声に、そして何よりその存在感に。全員が見惚れている。全員が見とれている。

まあ、ただ一人ぼくという例外を除いてだけど。

静寂は何秒、何十秒、何百秒と続いているような錯覚に陥る。そんな静寂に見かねた水澤先生がおろおろと手をこまねきながら、「え、えっと……」と何かしゃべろうとしたとき、ふくらみ続けている風船がわれたように、クラスメイトが発狂した。文字通りに。「キヤー、かっこいいー、ステキー」「女神キター」「ちょー美人、肌白ーい」「俺、このクラスになれて、良かった。……うっ、う」「泣くなよ」「髪さらさらそー」等々と彼女のことを闇雲に褒めちぎる。確かに容姿は群を抜いていると思う。顔立ちが端正で凛々しく、腰ほどまでに伸びている髪はつややかで美しく、すらりとした170ほどの身長はモデルをみるかのようだ。そしてその立ち振る舞いが彼女の美しさを際立たせている。

まあ、どうでもいいことだがね。

今だ続く壮絶っぷりに彼女はふふっと軽くほほえみ「ありがとう」と言った。そんな仕草がさらに拍車をかける。より熱を帯びていく。彼女は困りも、照れる仕草もしない。ただ、温かく、見守るように

眺めているだけだ。

……ん？

ぼくは気づく。

彼女は……。

彼女は、ほんとうに温かく見守るような、愛ある母性的な瞳を
していたらどうか？

彼女の眼を見る。

……………。

まあ、どうでもいいか。

水澤先生が必死にクラスをたしなめるとクラスメイトの熱は少し
ずつ冷めていき、落ち着き始めていた。では、と水澤先生が彼女に
対しての質問しましょうか、と言い、クラスメイトは一気に彼女に
質問攻めにした。だが、彼女は困るそぶりも見せずただただにこや
かにしているだけだ。水澤先生はおろおろとしながら「一人ずつ、
一人ずつ」と促す。そうしてどうにか彼女に対しての質問大会が始
まった。

クラスメイトが彼女に興味や好きなもの嫌いなものなどと定番な
質問をかけていく。クラスメイト全員は彼女に対し興味がとてもお
ありのようで、ぼくには彼女に興味がない。

まあ、確かに彼女に対してなんらかの異質さ？不自然さ？を感じ
たような気はしたが……。

些細なことだから、ぼくは流した。

ぼくは机に突っ伏す。眼を閉じる。耳からクラスの喧噪が聞こえ
る。それはぼくにとっての雑音。だが、興味がない授業で教師がし
やべるのが呪文か、子守歌に聞こえるように、クラスのざわめきは
ぼくにとっての子守歌。

……眠くなってきた。まどろみを感じる。ほんの一瞬何か視線の
ようなものを感じた気がしたが、睡魔がやってきた。ぼくを眠りに
誘った。

?

誰かがぼくの肩をトントンと叩く。

んっ、と意識が目覚める。どうやらぼくは軽く寝入ってしまったようだ。顔を上げ、うーん、と首を動かし、コキゴキと首をならす。けだるい気分だ。時計を見る。

……十一時五分。

ホームルーム

……一、二限はHRのはずだったから……、今は三限前か。

教室内には誰もいない。三限の授業はたしか音楽。ああ、移動教室か、と思い出す。だるいなと思う。サボっちゃまうかと考える。一、二限と寝てたことだし、と机に突っ伏す。

「君、いい加減起きたまえ」

ばしいん、という音が聞こえた。ずきいん、という痛みが頭に響いた。顔を上げる。そこには、腰に手を当て、ぼくを見下ろす女の人が立っていた。……こころなしか右手が赤くなっていて痛そうだ。……はて？

「……どちらさんで？」

おもわず声に出してしまった。失礼千万だなぼくは。まあ、いいんだけど。

「うむ？朝に自己紹介をしたはずなんだがな……」

そう答えた目の前の彼女は落胆やあきれられる様子もなく、むしろ逆に好奇心な目をしていた。まあいいとうなずきながらにつこりとして言った。

「少し話があるんだ。つきあってくれ」

「……めんどくさい」

その受け答えに彼女はムツとする。

「少し話があると言った。場所はここじゃない方が良い。女の子の頼みを受けないのはやぶさかじゃないかい？」

彼女はまくし立てる。そして「ああ、それと」と付け足す。

「君が答えるべきである言葉は“はい”か“YES”の二択しかないから、肝に銘じておくように」

「……いいえ」

ぼくは間髪を容れず答える。

「拒否は認められておりません」

彼女はニコツとする。

「……人間には選択する自由というのがあります」

「私の前で法律など無謀極まりないよ」

胸に手を当てながら言う。彼女の表情は聖母のようだ。

「……ちなみに拒否したら」

「殴ります」

悲しいことですが、と付け足し、右手で拳を握る。そしてぼくを殴った。

「……いい右もってますね」

思いの外重かった。左ほほが痛い。というよりはぼくはまだ答えてすらいらないのに。

「ふふっ。かのフェザー級ボクサー千石三国をも一発KOさせる予定の自慢の右だからね」

ふふん、と胸を張って答えた。

「……千石三国はライト級だがな」

ぼくは左ほほをさすりながら軽く訂正を促す。

「That's right（そのとおり）！」

「……いつまでこの問答をつつけるんだい」

嘆息しつつぼくは訊く。

「では、屋上へ行こうか」

彼女はそういつて歩き出す。なんて話しを聞かない女だ、と思う。彼女はふと、立ち止まって振り向き「ああ、それから」と言い、「ついてこないとフェザー級三国もびっくりな右をおみまいするからな」と付け足し、ふふっと笑ってから再び歩き出した。

……………。

ぼくはため息をついて席を立つ。

……三国はライト級だがな。ぼそりとこぼした。

時刻は十一時十五分。五分前にチャイムが鳴って、今歩いている渡り廊下には、ぼくと祐天寺さんの二人だけだ。今はもう授業中である。生徒は各教室で授業を受けていなければならない。だから、今、この場に授業を受けていなければならない生徒が二人廊下を歩いているのはおかしいのだ。要は、サボりである。

………。まあ、ぼくは授業という授業はどうせ寝るのだから、さして問題はないんだけどね。

だが、この彼女、転校生は初日にして授業をサボるとはたいした度胸……とでもいうべきなのだろうか？とかくまあ、ぼくはいまいち事情を飲み込めないまま祐天寺さんの後ろについて行く。彼女の歩くスピードは速くズンズンと先へ進んでいく。逆にぼくの歩みは遅い。ウサギとカメのようだ。だからといって勝てる見込みは何一つない。ぼくと彼女の距離はどんどん離れていく。自惚れや怠惰をしないウサギは全戦全勝だ。先を歩く彼女は急にピタリと止まり、振り返ってぼくとの距離を見計らってから言った。

「遅いな、早く来たまえ」

そう言い放ち、ズンズンと先へ行ってしまった。

……待たないんだ。……まあいいけど。

ぼくはそのままのスピードで歩いた。

屋上に到達すると祐天寺さんは腕を組みながら、仁王立ちして待っていた。

「遅いな、君は、デートで女の子を待たせるような甲斐性なしなのかい？それは感心せぬな。改めるのを勧めるぞ」

……ひどい言われようだな。

「まあ、こちらが急に呼び出したのだからな、今日は大目に見ておこうじゃないか」

ふふっ、優しいだろといわんばかりのドヤ顔を浮かべている。

……そんなことより。

「……それで、ぼくに何のようがあるんだい？」

たかだか二時間前に転校してきて、接点どころか、面識すらも危ういはずなのにぼくを呼び出す理由が見あたらない。まあ見あたって欲しくもないが……。それよりこんなところを誰かに目撃でもされたら面倒くさいことになるのは十中八九目に見えている。だから、来たくはなかった。が、痛いのも嫌だ。結論、どうにもならないのである。

「ふふっ、そうだな、本題に入ろう」

彼女は胸を張って言う。

「君のことが知りたい」

……。しばし思索する。

「……それは告白かい？」

ぼくはただ淡々と訊く。

「ああ。ただし恋愛感情の類ではないぞ。知的好奇心というやつだ」
彼女も淡々と答える。

「……じゃあ、ぼくの何が知りたいのかな？」

「君は……、他人というものに興味がないだろ」

……。

「……なぜそう思う」

「女のカンさ」

……この女ドヤ顔で言い切った。……まあ、あたりだが。

「……用件はそれだけ？なら失礼するよ」

ぼくは返事もせず踵を返す。こいつに関わるとなんだか面倒くさいことになりそうだな、と直感した。早々にこの場を退散せねば。
だが、

「待ちたまえ」

がつ、とぼくの肩がつかまれる。

しくったなど、思った。

この流れは……。

「君のことを知りたい、と言った。わかるかい？ 女にここまで言わせて何も答えずに立ち去ろうとするのかい？ それは男としてどうだい？ ここまで言えばわかるよね？ 空気でわかるよね？ 私はね、君を校庭で見かけたときから君がなんか普通とは違う雰囲気を持っているなと思ったんだよ。教室で君を見つけて、君の目を見たらよくわかったよ。普通の人と違うものを見るような目だもの。」

私は、君のことが知りたい。君はどんなことを考えているか？ どんな風に生きているか？ なんてことをさ。それに……。まあいい。だから、今後、これから君は私とつき合ってもらおう。ふふっ、これは決定事項だよ」

彼女はぼくに指を向けて言った。

……面倒なことになった。もはや考えたくもない。

「ああ、それから」と彼女は付け足す。

「先に言ったとおり、君の選択肢は“はい”か“YES”。どちらかだよ。よく考えてね。ふふっ」

……本当に面倒なことになった。

?

学校中に本日の授業の終了を告げるベルが鳴り響いた。キンコーンカーンコーンと鳴り響く。

その音でぼくは目を覚ました。午後の授業も全部寝て過ごした。学生にとってはあり得ないことだろう。だがぼくにとっては授業というものに興味が無く、担当の教師の熱弁もどうも思わない。勉強は自分のためだと教師は言うが、どうも自分のためだとも思えない。だからか、ぼくは授業を寝て過ごしている。今までも。これからも。それに授業はつまらない。暇である。寝て過ごす方が有意義といえるだろう。だが、それでは教師は納得しないであろう。だからぼくは処世術として睡眠学習を覚えた。ただ寝ているのではない。そういうことにしている。

まあ、事実としてぼくは他人よりも頭脳は優れているため、そこら辺はもうあきらめられているらしいが。まあ、気にもとめないんだがな。

前担任は、どうやら困っていたらしいが、そんなことに興味はないし、どうも思わない。人間というのは最終的には自分自身のことを優先するのだ。他人は関係ないのだ。そういう生き物なのだから。言える言葉は一つだ。「どんまい」だ。

……帰るか。

そう考えた。その時「どこに？」という心の声が聞こえた気がした。女の子の声だ。ぼくの欠陥。ぼくの心に？頭に？ささやいてくる気がした。「帰る場所なんてあるの？」と。

ぼくはそのささやきにいつものように答える。帰る場所はある。だが、居場所が無いだけである。居場所を作る予定も探す予定もない。今も、これからも。だから、ただぼくは彷徨うだけである。ゆらゆらと。ただ漠然と。

よいしょ、とぼくは席を立つ。帰る準備をする。準備と言っても

鞆を持つだけだ。机の横にかけてある鞆を取って……。あれ？ない？鞆がない？何故？

席に座りほんの数秒思考を放棄してみる。そして、何が起きたかを思い出す。

……。鞆を持って来忘れた？それは……。ない。昼にはあった。どこ置いたのだろうか？

再び思案する。が、思いつかない。どうしようと慌てるわけではないが、不思議だと思っている。でも、まあ、ぼくの鞆があらうとなかろうとあまり重大なことではない。ぼくの鞆には何も入っていない。もってきた教科書の類は、すべて机の中。筆箱もだ。つまりは、持ち帰るものは何もないのだ。そう考えると、別になくてもいい気がしてきた。だが、それでも自分のものがなくなったのは気になる。自分ではないと仮定してみる。置き忘れたとかではなく、他人がやったのではと憶測を考慮してみた。クラスの誰かがやったとすると仮定する。……。候補が一人挙がった。というかあの女しかない気がしてきた。それを踏まえ結論を出した。

……。帰ろう。面倒が起きる前に。

席を立ち、教室内を見渡す。放課後になり、帰宅する人、部活に励む人、教室内に残り友達とおしゃべりをする人たちなど様々な時間を過ごすため、人はまばらであった。その中にあいつがいるかを確認する。……。いない。今が好奇と思い、そのまま教室の出入り口に向かう。教室の前側の扉を開く。そして、教室を出て、階段へ向かおうとする。だが、階段で祐天寺さんが立って待っていた。嫌な予感がしてくる。彼女はニコニコとしている。彼女をよく見ると右手に見覚えのある鞆を持っている。ぼくの鞆だ。予想的中。悪い方に。

「やあ、何かお探しかな？」

彼女は気さくに声をかけてくる。ぼくはよくまあぬけぬけと言えたもんだなあとする意味感心する。

「……いや、何も」

「君が探しているのは、この金の鞆かな？それともこの銀の鞆かな？それともこの普通の鞆かな？」

ぼくの言葉を見無視して、彼女は小芝居を始めた。どう手に入れたのかわからない金と銀の鞆を見せて、最後にぼくの鞆を見せながら訊いてくる。それにぼくは、

「……………」

答えない。

あきれたように彼女を見る。実際、あきれているし。その彼女はというとぼくにお構いなしにしゃべる。

「ふふっ、君の視線から察するにこの普通の鞆だね。ご名答。正直者の君には普通の鞆だけでなく、この金と銀の鞆もあげようじゃないか」

……………いらねえ。

そう思いながらもすでにぼくの腕の中には三つの鞆が収められている。彼女はふふっ、と満足気だ。続けて彼女は言った。

「あと私と一緒に帰ってあげる権利を上げよう。うれしいだろ」

「……………いや、別に」

彼女の言葉に抑揚もなく答え、鞆三つをもって帰ろうとする。が、彼女にまたも阻まれる。

「全く君は、こんな美人と一緒に帰ろうと言っているのに……………、すこしは喜びたまえ」

彼女はため息を一つつく。

「……………別に、興味ないし」

ぼくは無感情に、無関心に言う。

「まあ、君の興味はともかくとして、だ。女の子一人で帰宅するのは何かと不安だろう、春だし、変な人に絡まれるかもしれない」

……………ぼくは、今まさに絡まれているのだが。

「そうならなかったためにも、頼りになる男の子いないかなあ」

チラッとこっちを見てくる。白々しい。だが、そこまで言うならと思い、答えてあげた。

「……さようなら」

彼女の脇をすり抜けようとする。

「待ちたまえ」

ガシッと腕をつかまれた。ぼくの腕に彼女の指が食い込む。握力が女性のものと思えない。

「……ナンデスカ？」

彼女の握力に驚き、カタコトになった気がするが気にしない。

「君にあれこれと言っても意味はないのだな……。よく分かったよ。ならば、私も手段を選ばない。君！」

……嫌な予感しかない。

「一緒に帰ろう！」

「……けっこうです」

「ちなみに、一緒に、帰らなかったら、君を殴る」

右拳を上げて言う彼女。

ぼくはそれにため息で答えた。

時刻は四時四十五分。現在僕らは校庭を歩いている。下校時間のピークは過ぎて、人がやんわりと少なくなってきたところだ。春の陽は、日中と違い気温が落ち着き、ほどよい気温だ。時たま吹く風は、春といえどまだ冷たく手がかじかむ。かじかんだ手を温めるために両手を制服のズボンの両ポケットに突っ込む。そうすると、最初は布越しに肌がひんやりとするが徐々に熱を帯び、温かみが増していく。校門を抜け、そのまま登校時と同じ通学路を歩く。そこには周りの人々、同じ学校の生徒も少なからずいる。それはいい。関係のないことだ。いつもの光景。

だが。

視線を感じるのは、ぼくが自意識過剰だからであろうか？

……そんなわけではない。

ぼくは、ふう、とため息をつき右にいる人を見る。祐天寺神流。

彼女は人々の目を引きすぎる程の容姿をしている。その歩く姿も優雅で可憐といったところか、老若男女とわず振り向かせる。そして、目を引かれた者たちはこう思うだろう。キレイだ、モデルだろうか、と。そして、隣にいるあの男は何なんだ、と。おそらくは、いか中八九思っているに違いない。なぜなら、妬みのような、恨みのような負の熱視線を感じているからだ。

……ああ、面倒だな。

ぼくは、ふう、とまたため息をついた。それに彼女は気づいて言った。

「どうした、ため息なんて。こんな美人と一緒に帰ってるんだから、にやけ顔はあれ、ため息することなどないよ」

「……はあ」

ぼくは彼女にあきれつつ、ため息をついた。

「君……。ため息すると幸せが逃げるよ」

「……幸せではないので、関係ない」

「世に言う屁理屈だね。もう一回言うけど、美人と歩ける。こんな幸せはないだろう？」

「……人質を取られ、脅迫され、無理矢理一緒に帰らされて、幸せはない」

……そもそもぼくに幸せなどは訪れない。わかっているんだ。

そうこう言いながら歩いていると、視線がきつくなるのを感じた。周りの人が今にも人を殴り飛ばすような血走った眼まなこをしている。どうやらあの不毛なやりとりをイチヤついているようにとらわれたようだ。冗談ではないと思った。こっちは迷惑千万。加えて、見も知らぬ他人から理不尽な感情をもらうなど面倒だ。早く離れたい。

歩くこと数分で、分かれ道の十字路についた。向かって左に曲がれば住宅街。まっすぐ進めばそのまま土手と河原に。右に曲がればショッピングモールといった商店街だ。ぼくの行く道は左の住宅街である。問題は彼女だ。どっちへ行くかだ。

「私の家はこのまままっすぐだ」

彼女は前方に指をさして言った。

「……ふうん。ぼくは左なので、さようなら」

そう言い、ぼくは左を向く。が、右肩に手が乗った。彼女はニコニコとしている。

「まあまあ、そう言わず、途中まで送ってよ。ねえ。こんな美人が頼んでいるのだよ、男としての返事は？」

「……さようなら」

振り切って帰ろうとするが、右肩に手が食い込む。とても力強く、ちよつとやそつとでははずせそうにない。もとい、逃げられそうにない。彼女はうーんと何か思案してから言った。

「そうだ、君が来ないなら、私が君について行こうじゃないか。どうだろう。ね。……嫌なら……分かるよね」

ぼくは本日何度目か分からないため息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6702x/>

神様と出会う二つの方法

2011年11月15日03時07分発行